

『秋籥笛語』の考察

——啄木十七歳の旅立ち

黒澤 勉

目次

- 一、退学と上京——「常識」からみた「謎」
- 二、『秋籥笛語』中の短歌について
- 三、啄木の人生の出発点としての『秋籥笛語』

一、退学と上京——「常識」からみた「謎」

啄木の人生・行動は「常識」の目からみれば不合理で不可解な「謎」に充ちている。啄木の遺した詩や短歌・散文は人の心を打ち、今なお多くの人の共感を生んでいるが、その行動と人生は変化に富む波瀾万丈の生涯であり、容易には理解しがたい。啄木文学に魅かれる人の中には、その人間性や行動にまで共感を示している人もあるが、私にとって啄木は、（これまで尊敬の念をもって読み親しんできた賢治や子規のような存在に比べて）共感を抱ける存在ではない。むしろ疑問や反感さえ抱くことがある。私は、一九九六年に国際啄木学会に入会したが、それは啄木ファンだからではなく、盛岡で文学研究を業とする者として、当然、知っておくべき、考えておくべき作家であると考えたからであり、また毎月行われている盛岡支部での研究会にも加えて頂いて研究者同士の交流を深めたという動機からにすぎない。共感から始まるのが多くの文学研究のスタートであろうが、その点、私は、今のところ、むしろ批判的という立場に近い。その作品についても巧みだとか、面白いと感じることは多いが、率直に言っている信頼感もてないものもある。それでも啄木を読んでいる。私は啄木をよく理解していかないと思うし、表現と行動の結びつき、その全体像について納得できるものをもちたいと思うからである。私にとって啄木は、理解しがたい「謎」の文学者なのである。

作家を理解すること、その精神と行動の軌跡を理解することは、実はそんなにたやすいことではない。特に啄木の場合、わずか二十六年の生涯中の十年間、その行動は、平凡な、波風の立たぬ人の生涯の幾倍にもあたる複雑な変化と曲折に富んでおり、作品は、その生涯と密接に関連している。啄木理解の一つの鍵は、作品と生涯、行動と

のかかわりを読み解き、深層の心理にまで迫ることであろう。作品は作家から自立したものと考えて、作品だけを切りとって理解しようとしても不十分であるし、その行動や生涯だけを追っても啄木の真の人間性は見えてこない。啄木の人生は文学に賭けた、そのための人生であり、その文学はまた啄木の生の軌跡を様々な形で映し出している。以上のような考えのもとに、「常識」で捉えられないその行動の「謎」に、表現とその心理を考察することを通して迫ってみたい。

啄木の生涯は、明治十九年の、その誕生をもって始まるが、自覚的に自らの道を選びとり、その道を歩み始めたのは明治三十五年十月の盛岡中学校中退と、それに続く上京にある。中退は上京を決意した上での中退であった。啄木、実に十七歳（呱呱の声をあげてより十有七年」と『秋詠笛語』にある）の少年であり、これによって啄木は文学に賭けたその生涯の第一歩を歩み始めるのである。『秋詠笛語』は、その栄光と挫折の、最初の日記であり、啄木最初の散文作品として、そして、以後一貫して書き続けられる日記文学の最初の結実として重要な意味をもっている。

啄木の最初の「謎」はこの十七歳の時の盛中中退と上京にある。なぜ卒業を半年に控えて、中退上京の道を選んだのか。上京の意志を告げた時、家族の誰一人賛成する者なく、友人も皆驚いて反対したという。しかし、啄木は何事に対しても、人の理解や同意を得て行動することはなかったようである。両親の年老いて生まれたただ一人の男の子であり、溺愛されてわがままに育った啄木は、決意したことはただちに行動に移さずにはおれない性格だった。思慮分別より空想にも近い理想と情熱が優先し、自分の感情に支配されて行動した。十七歳の甘やかされて育った寺の息子は、世間を知るにはあまりに幼かったようにみえる。以後、これに似た一人合点の選択はしばしば繰り返される。

自が才に身をあやまちし人のことかたりきかせし師もありしかな

後になって啄木は、己が青春——というより「思春期」の過ちに気づき、深い痛悔の念を覚えることになる。しかし、それは後年の話であって「熱病」に捉われている中であって、そうしたことに気づくはずもなかった。ここで私は「熱病」という言葉を使ったが、世の常識に反抗し、夢に浮かされ、無謀な行為に走り、その結果、文字通り病床に臥すこの時期の啄木を普通に言われる「情熱」という言葉ではなく、そう表現してみたいのである。十七歳の啄木——それは「熱病」の少年、詩人である。「熱病」には個人的にそれにかかり易い資質（感受性）と同時に感染源があり、それを育てる環境がある。それらを全体として把握してはじめてその「熱病」の意味を明かすことができるだろう。私は啄木のこの熱病の正体を突き止めてみたいのである。

上京前の啄木の行動について最も信頼に足る記述は、妹光子の次の文章である。

「兄が中学五年の夏休みであったが、休みが終わっても学校に帰ろうとせず、学校をやめるといいだした。父母はすっかり驚いてしまい、わずかあと半年で卒業できるものと大反対だったが、兄は校則にしばられるのがいやだと、どうしても承知しなかった。

この事件も、石川家に学資がつづかなくなったからだという話もでてくるようだが、決してそんなことではない。少しも勉強しないので落第しそうだったからだという説は、あるいはほんとうであったかもしれないけれど、東京への憧れ、与謝野さんたちの魅力が最大の原因だったろう。」（『兄啄木の思い出』以下同じ）

この記述によれば中学五年の夏休みに両親に退学の意向をもらしたということになる。退学してどうするのか、当然両親はそれを尋ねたであろう。「文学で身を立てるために東京に出るのだ」と啄木は答えた。両親はあまりに無謀な決意に大反対した。県下でただ一つしかないエリート中学校に入り、息子の将来の出世を夢み、あるいは息

子が僧職を継ぐことを願っていた両親としては、「文学」などというわけのわからぬ、安定した収入のない道楽、趣味程度のものに生涯を賭けようとしている啄木が全く理解できなかった。父は短歌を作っていたが、それは息子を理解するに何ほども役に立たなかつたろう。両者は対立のまま別れ、啄木は夏休み明け大人しく盛岡に帰り、中学校に通っているように見えた。しかし「熱病」に侵されている啄木は今更、勉強することなどあまりに馬鹿らしく思われた。身体こそ学校にあれ、心は上の空で、東京への憧れ、文学への夢にのぼせあがっていた。そうでなくとも授業の大半を欠席して文学書を読み耽り、深夜まで起きているというような状況で、秋に行われる試験勉強に取り組もうにも、全く準備不足であつた。九月二日、特待生の狐崎嘉助と相謀つて数学の試験で不正行為に及んだ。それが発覚し、学校の掲示所に名を掲げられることとなる。不正行為の発覚について啄木は、むしろ退学のいい理由ができた、両親をこれで説得できるくらいに気持ちであつたろう。不正行為といえ、友人にも恥ずかしく、屈辱感に襲われみじめな思いでうつうつと過ごす学生も多いと思われるが、啄木には全くそうした後ろめたさはない。むしろ退学——上京を「晴れやかな出発」と考えていた。要するに、学校などどうでもいい、つまらない所だという思いで一杯だったのである。啄木の退学について学資が続かなかつたとか、僧侶として後を継ぐことを拒否するためだなどという説もあるが、『秋詠笛語』をみればそのような消極的な動機ではなく、文学の道を選ぶとする積極的な人生の選択であつたことが知られる。もし、そのまま中学に残るとしても、落第は必死の状態であつたら、落第の屈辱よりは自ら縁を切る自主退学の道を選ぶ方が、誇り高い啄木の心情にかなつていた。それにしても根底にあるのは学業、学校よりも、文学への熱中であり、文学者として世に立とうとする夢、理想である。

中退、上京、そして文学で身を立てる、これは両親にとって全く困つた決意であつたが、母は仕方がないと着物を準備し、送り出した。ここにも親の甘さがある。啄木が言い出すとつい妥協し、援助せずにはおれなかつたので

ある。啄木の上京は、学校に入るといふあてもなく、送金さえ頼むことのできない、着のみ着のままの無謀な家出にも近かった。田舎の、文学にかぶれた少年の家出——それは歌手になろうと憧れて東京に出る青年達の気持ちに似ていないわけでない。

「兄はとうとう強情をとおし、母の手でしたくをしてもらった白い縞の着物に黒紋付で上京していった。それは明治三十五年の秋、兄が十七歳のときだった。いったいに早熟であった兄の内面生活には、すでにこのころから、かなり変化も生じていたのであろう。またいろいろ複雑な問題も起こりかけていたように思われる。学校の窓をぬけだして不來方城跡の草むらに寝ころんでいたのもこのころのことであつたらう。

上京後の兄については何もはつきりしたことは覚えていない。もちろん学校にはいるためでもなく、故郷から送金するでもなく、まったく独立していかねばならない彼の境遇であつたから、身心ともにかなりむりもしたことであろう。そのために、友人の誰彼にも迷惑をかけたかもしれない。」

啄木はユニオン会の親しい友人達にも「学校はつまらないからよすんだ」と語り、上京して文学で身を立てるのだと語っていた。友人達はその言葉に驚き、あと半年で卒業するのだから辛抱しろ、と教えさとしたが、啄木は全く意に介せず、一人上京した。しかし上京した啄木が一人で生きられるわけはなかった。上京中の啄木は盛中時代の先輩を頼り、その世話になった。親類知人の東京にいない啄木にとって、まず頼るべきは先輩であつた。盛中時代、学年の上下を問わず多彩な交流を結んでいた交際家、啄木はこういう時、簡単に友人を頼ることができたし、盛中の生徒、同窓生は、仲間としての連帯感も強かった。啄木はまず、この盛中の先輩を頼り、やがて憧れの鉄幹や晶子など新詩社の歌人に近づいていこうと考えた。

上京して、しばらく家族への音信も絶えた。母は泣きながら仏前に坐って一人息子の無事を祈った。待ちに待つ

た手紙が来た。手紙は、東京で病気になったので何とかしてほしい、という助けを求める訴えだった。久しぶりの手紙は、両親のあらたな悩みの種となった。光子は次のように記している。

「両親の一時の喜びは姿をかえて新しい心配になった。とうとういたたまらず、父が上京して兄を連れ帰るべく相談がまとまった。しかし、なんらの貯えとてあるわけでない寺の生活のなかから、二十円の金だって、そのころとしては急にはできない大金である。そこでやむをえず父は、檀家の主だった人々と相談する暇もなく、裏の万年山の栗の木を売り渡すことに決めて、ともかく二十円の金をつくって上京したのであった。

そしてこの栗の木を売ったことが直接の原因になって、私たちの一家は住みなれたこの寺をでなければならぬ日がやってくるのだが、それは後のこととして、ともかく迎えに行った父に伴われた青白き青年啄木は、敗北者の淋しさを胸いっぱいいたたえながら悄然と帰ってきたのであった。上京してわずか三ヶ月そこそこの冬の間のできごとであった。この栗の木を切ったあとには、父は杉の苗を百本植えた。」

啄木が上京中、経済的に行きづまり、それを助けようとした父、一禎が寺の栗の木を売って上京、それが檀家の人々の不信感を招き、宝徳寺追放の「直接の原因」となったという指摘はきわめて重大である。啄木一家の経済的困窮——やがて自ら担わなくてはならなくなった貧しさは、啄木自らの少年時代の夢の報いともいえるからである。病いと貧しさにゆき詰まった啄木は、明治三十六年二月十七日、父に伴われて帰郷した。上京したのが十月三十日であるから三ヶ月半の東京での生活であった。

十一月二十二日の日記に次の一節がある。

「午後図書館に行き急に高度の発熱を覚えたれど忍びて読書す。四時かへりたれど悪寒頭痛たへ難き故六時就寝したり。折悪坂下の小社の縁日の事とて雑駁の声紛々として耳を聳せしめんとす。かくて妄想ついで到り苦悶のうち

に眠るは九時すぎる頃なりき。終夜たへず種々の夢に侵さる」

日記はこの後、十二月の記述は一日、二日、三日と続くが、その後は同月十九日の「日記の筆を断つこと茲に十六日、その間殆んど回顧の涙と俗事の繁忙とにすぐしたり」という記述で終わっている。「俗事の繁忙」とは何であろう。収入の道を求めざるをえなくなったこと、そしておそらく健康の不安があったに違いない。家から援助を受けることなど予定はしていなかったが、どうしてもやっていけなくなったのである。十一月二十九日付の瀬川深宛書簡に「陰や雲や暗に掩はれたる無限の前程を行くべし旅の身の私、孤影を京路の風にはかなむ今の有様にてはげにげに郷と友と恋人を憶はざる事あらんや。しかはあれ君よ、我は病のため、生計の費を得ん為に殆んど筆紙に親しむ能はざるを如何せんや。生はイプセンの John Gabriel Borkman てふ劇曲の和訳をなし居候。これ吾に当分の衣食を供すべき者なり」と記したのは、最後のから、元気であり、上べをとりつくるう見栄であった。やがて下宿代も払えずに病臥している啄木を、下宿主は虐待し、食事も出さなくなった。着物や袴を質に入れて食いつないだが、とうとう追い出され、行き所もなく東京をさまよい見ず知らずの勤め人に助けられたりした。「風邪だの脚気だの病気を六つ背負って、横になってあえいでいた」と金田一京助に語ったように、この上京は貧窮と病い（六つの病氣）には神経症とか結核なども含まれるかもしれない）に倒れた無残な敗北であった。「俗事の繁忙」と強がりを書いているうちはいい。その後の二ヶ月の沈黙は甘やかされた少年をうちのめしたことを物語っているよう。

しかし、この上京と挫折がなければ、詩人「啄木」の誕生はありえなかった。夢破れ、失意と病いのうちに、節子の励ましと愛を一身に受けてやがて結婚。その愛の成就と詩人「啄木」の誕生はあい重なるものである。

これまでの叙述の中で、私は啄木という雅号を使ってきたが、厳密に言えば、誤りである。なぜなら『秋詠笛語』は石川白蘋の作であり、「啄木」という雅号は、挫折して帰郷、再び文学者として雄飛すべく故山にあって生を養

っている中で生まれるのである。それは歌人白蘋から詩人啄木への脱皮でもあった。

上京挫折後の、以後十年にわたる啄木の生涯を考えてみると、文学者たらんとして上京、そして病いと貧困に苦しむという行動様式は同じパターンのように繰り返されていることに気づく。その意味で『秋詠笛語』は、啄木の人生と文学の軌跡を原型として示したものだともいえる。

二、『秋詠笛語』中の短歌について

啄木は『秋詠笛語』と題を記したその下に括弧書きして（白蘋日録）と添えている。「白蘋」の日々の記録である、とその著者、ジャンルを示したものである。「白蘋」はこの頃の啄木の号（「啄木」と号するのは明治三十六年十二月一日『明星』に「秋調」と題する長詩五編を掲載したのがその初めである）であり、日記とはいえそれを用いたところに、啄木の文学者意識——十七歳の少年の気取りを伺うこともできる。それは、文学者の日記・文学としての日記なのである。啄木は歌人として、文学に目覚めた文学者で、その号も主として短歌を発表する時のものだった。ここに至るまでの号をまとめておくと次のようになる。

- ① 明治三十四年九月盛岡中学校回覧雑誌「爾伎多麻」を発行、美文と短歌を「翠江」の名のもとに発表した。
- ② 明治三十五年一月岩手日報紙上に「白羊会詠草」を掲げ「麦羊」と号した。
- ③ 同年三月盛岡中学校交友会雑誌二号に「白蘋」の筆名のもとに美文と短歌を発表した。

『秋詠笛語』の背景には『明星』への心酔がある。日記中にも、鉄幹や晶子、花郷、せつ子への歌が記されていて、「一日詠歌にくらす」という記述もみえる。『明星』の短歌は後述する高山樗牛の思想とともに啄木を生み育

てる母胎であつたが、それは単に短歌の創作にとどまらず、『明星』的、樗牛的な美文の創作、そして自らを詩人（芸術家）とする自覚や、その自覚に立つ生き方にまで及んでいった。ここでは『秋籥笛語』に至るまでの短歌について少し考察してみたい。

明治三十一年、啄木が盛岡中学に入学したころ、軍人に憧れていたことはよく知られている。軍人への憧れが、文学者、詩人への憧れへと転ずる。この背景をまず探ってみよう。明治二十七、二十八年の日清戦争は、日本が初めて外国と本格的に戦った近代的戦争であり、これを契機に愛国心が国民的な高まりを見せた。アジアの、名さえ知られていなかった「日本」という一小国が大国、清国を相手に勝利を収めたのは諸外国にとって、予想外のことだった。国中が勝利に酔い、好景気にわき、紡績業を中心とする産業革命が進展、軍備拡張も進み、ヨーロッパ列強に伍する「大日本帝国」の名が世界にとどろいた。啄木がそのような時代に、最も感じ易い思春期を過ごしたことは、その人間形成に大きな影響を及ぼしている。啄木の自我肥大妄想とヒロイズム、ナルシズムは、一人啄木のみならず、日本全体を包う高揚感とも通うものがあり、啄木は文学者として、その時代の気分を最もよく表現し、時代の空気を後の世にまで伝えているといえよう。

軍人になるといひ出して苦勞させたる昔の我かな

うつとりとなりて剣をさげ馬にのれる己が姿を胸に描ける

大日本帝国の軍人——馬上の凛々しい姿を啄木は夢みた。強い夢、憧れの中にあつて困難に耐えぬわが身の病弱や、寺に生まれたただ一人の男子で、やがては両親をみなくてはならない運命にあるなどといった己れを取り巻く諸条件は無視された。夢のように憧れているうちは、そうした憧れに身を焦がしている自分の姿は見えない。これらの歌は後年の、夢から醒めた啄木の回想の歌でもある。

啄木は盛岡中学の多くの少年達のように軍人に憧れ、入学当初は陸軍の軍人を夢みた。盛岡中学では兵学校志望者、士官学校志望者の間で、上級下級を通じての集会もあり、啄木も学年の上下を問わず多くの人と交友関係を結んだ。上級生の影響は大きかった。二年生になると、二年上級の及川古志郎の影響を受け、海軍の軍人を夢みるようになる。新調した夏服は短い上着にラップズボンという海軍のスタイルを真似、及川の子分のように得意になって歩いていた。やがて、及川の語る文学論に啄木は次第に興味を覚え、当時青年の心を捉えていた与謝野鉄幹の『東西南北』や『天地玄黄』を借りて読むようになる。軍人への憧れから文学者への憧れへと転ずるにあたって大きな役割を果たしたのは、後に海軍大将ともなったこの及川古志郎であった。

三十五年、啄木は中学三年となり、この年、及川を介して二年上級の金田一京助を知る。金田一は『明星』を愛読し、すでに花明と号して短歌を作っていた。『明星』はこの年四月、東京新詩社から発行された短歌を中心とする文芸雑誌である。啄木は金田一から『明星』を借りるや、たちまちその世界に心酔していく。

この頃の啄木を知る金田一は「真似し小僧、天性の真似し小僧だった上に、一事へ没頭すると全力を挙げて傾倒する凝り性だった」（「啄木余響」と評し、啄木が及川古志郎の書風をまね、『明星』の一条成美のカットを巧みにまね、晶子の歌をそっくりまねていた、ということを指摘している。

模倣と没頭、これはこの時期の啄木の大きな特徴である。服装や書風、カットから歌風に至るまで、啄木は模倣した。模倣の根底にあるのは対象に対する強い憧れであり、対象との情熱的な一体化である。「憧れ」という大和言葉はもともと、魂が体から遊離してさすらうことを表わすが、啄木ほど、この言葉のふさわしい人間はいない。別な言葉で言えば、啄木はロマンチストの一典型であった。現実を直視し、静かに内省するのではなく、崇高なもの、美しいもの、また英雄的なものに心から感動し、陶醉する。空想や夢に心は熱く燃え、情熱的な行動に駆られ、時

に現実の体制に反逆する。反逆は情熱を一層燃え上がらせる。啄木はそのローマン主義を『明星』から学んだ。それは学ぶというにはあまりに圧倒的な影響であった。啄木が学校という体制に背いて盛岡中学を退学したのは、『明星』のローマン主義の全人的とも言える影響を物語るものである。それは啄木を文学者とする最も重要な契機とはなったが、実人生の不幸はその代償となった。時代の思潮に感染した熱病詩人——それが十七歳の啄木の姿であった。おそらく『明星』には啄木のようなロマンチストが幾人もいたであろう。しかし、その中でも啄木はその文学的才能の豊かさ、早熟ぶり、そして行動力においてきわだっていた。

金田一は啄木の歌が晶子の歌の模倣だと指摘しているが、鉄幹や山川登美子の、またその他の歌の影響もみられるようだ。たとえば次のような歌。

- A、とことはに覚むなと蝶のささやきし花野の夢のなつかしきかな（山川登美子・『明星』第三号）
- B、なにとなく琴のしらべもかき乱れ人はづかしくなれる頃かな（『明星』第四号）
- C、知るや君百合の露ふく夕かぜは神のみこゑを花につたへぬ（『』）
- D、夕野ゆき折らで帰りし姫百合のなよびすがたを夢に見し哉（鳳晶子・『明星』第五号）
- E、白百合のちささが一つゆく水に流れていにぬ物もいはずして（『』）
- F、血に染みし軍の旗につつまれて佐世保にかへる君がなきがら（鉄幹・『』）
- G、鋸に似たる血がたな天地にとどめて死なば悔ゆることもあらじ（『』）

これらの歌と啄木の歌を比較してみよう。

- ①、なにか神のささやく如きこちしてそぞろ思ひにさまよひゆきぬ（明治三十四年九月 盛岡中学校回覧雑誌

「爾伎多麻」石川翠江

②、あきの夜のそぞろの夢よおはしまにうすむらさきのもすその女神（ 〃 ）

③、野の月に冴えしや銀の笛の音の清しさびしのそぞろの調べ（ 〃 ）

④、曙に春の驕りの鑿の音や奈良の木立に人想ひあり（明治三十五年三月「盛岡中学校校友会雑誌三号」石川白蘋）

⑤、羊よぶ調みだれぬ野の中の古江のあたり桃の花散る（ 〃 ）

⑥、血に染めし歌をわが世の名残りにてさすらひここに野に叫ぶ秋（明治三十五年十月『明星』石川白蘋）

①の歌は、Cの歌と相通うものがある。神の声とか神の囁きなどといった観念は、従来の日本の短歌には全く見られなかった観念であつて、『明星』が西洋文化の強い影響のもとに誕生したことが知られる。山川登美子に「聖書とりて百日百夜を山にこもり奇しき歌えて人にしめさず」（『明星』第五号）という歌があり、キリスト教に接していたらしいことも察せられる。しかし、『明星』における神は、キリスト教の神というより多神教的な美の神であり、空想的な、美しい、ギリシャの神々に近い。晶子に「おもざしの似たるにまたもまどひけりたはぶれますよ恋の神々」（『明星』第四号）という歌もあるようにそれは恋の神々であり、エロスの神ともなる。『秋詠笛語』中に「神を仰ぎ道なる花にはぐれきよ何地向きてぞ我れ歩むべき」という歌があるが、啄木がこの時イメージした神は、甘美な美の女神ではあるまいか。この歌は、美の女神を仰ぎ道端に咲く美しい花に目を奪われて道にはぐれてしまった、一体どちらを向いて自分は歩いていったらよいのだろうか、と美の世界に心酔しながらもそこに不安やとまどいを覚えていることを述べたものであろう。

②の「うすむらさきのもすその女神」は、Dの「姫百合のなよび姿」とイメージが相通うものがあり、いずれも恋人の面影をこのような空想的で甘美なイメージに託して述べたものであろう。『明星』の歌人達にとって、恋人は神のごとく美しい、汚れない存在であつた。『秋詠笛語』の中で啄木は恋人節子を「ああ吾恋しの白百合の花よ」

と呼びかけているが、それも『明星』で山川登美子を白百合女史（鳳晶子は白萩女史）と呼んでいたことの「真似」である。

③の「銀の笛の音」は、美の女神の吹く笛の音を幻聴のように夢うつつの中で聞いたというもので、これまた美への憧れを清純な幻想として表現したものであろう。

『秋詠笛語』の序に続けて「装ひて／花の香による／蝶の羽／秋は詠れの／笛によろしき」の歌が大きな文字で五行で分かち書きされている。この歌の「笛」は、美の女神の吹く、清らかな調べをいったものではなからうか。この歌の「装ひて／花の香による／蝶の羽」という句は、Aの「蝶のささやきし花野」に通うもので、「花」は美の、「蝶」はその美に憧れる自分の姿を象徴したものであろう。下の句の「秋は詠れの笛によろしき」は解しがたいが、『秋詠笛語』中に次の歌がある。

若き我れにふるべき鞭のつよき神詠れゆくを笛によみすや

歌の意味は、若い自分に試練として振らねばならない神の強い鞭なのだ、その美の女神の訪れは、美しい笛の音となつて聞こえてくる、それは旅立つ自分を祝福しているのであろうか、ということであろう。ここでいう「笛の音」というのは、おそらく美の神のささやきであり、天啓のように啄木はそれを聞いた。それが退学・上京へと啄木を促したものであろう。

「装ひて」の歌は、従つて次のような意味にならう。装つて、花の香のもとに集まつてくる蝶の美しい羽。女神の美しい笛が聞こえる秋、自分はその笛の音にいざなわれてこの秋旅立つのである。

『秋詠笛語』の題は、この歌によつてつけられたものだが、それは美を求めて旅立つことを暗示する、門出の笛の音を意味するものと思われる。

『明星』の第一号に吉丸一昌の「雑詠」と題する六首の中に次の歌がある。

神の御手に、我歌聞かんよしもがな、天つ鳥琴天つ鳥笛

啄木はこの吉丸の歌からも学んでいるらしい。『秋詠笛語』中の短歌に句読点を用いているのもその一つである。

また、この歌の中の「天つ鳥琴天つ鳥笛」は空の鳥の声を、琴としてまた、笛の音として聞いたこと、つまり自然の中に美の神のささやきを感じずる心を詠んだものであるが、「笛」と「琴」は『秋詠笛語』の序の中の次の第二首に登場する。

裂かば花に、碎かば琴の夢追ふ子追ふて旅する命の秋よ。

天琴に誰かよき音の幸守らむ秋掩ふ雲にわかれて去ぬる。

この二首のヒントとなったものは「天つ鳥琴」ではあるまいか。空行く鳥の啼き声を、琴や笛の音に美神のささやきに見立てる発想、それはやがて啓示を得て自らを「啄木」と号する発想にもつながっていったと思われる。

啄木は『明星』風の美の歌人としてその甘美な空想に酔うだけでなく、その空想が実人生、実社会において苦闘をもたらしことを自覚し、その苦闘の中で美を守り抜く詩人として悲愴な決意を抱いて出発した。「裂かば花に」の歌は、もし裂けるなら花として裂けよう、碎けるならば琴として碎けよう、たとえ裂け、たとえ碎けることがあろうとも、花や琴の夢をわが胸に追いながら生きるのだ、この秋、命の燃焼を求めて旅立つことだ、というような意味であろうが、花や琴の美を求めることが、裂けて、碎けるわが身の死を代償として得られるものとして捉えられており、美を求めることは悲愴な死を招くかもしれぬことを覚悟しての旅なのである。

次の「天琴に」の歌は、天上の永遠なる琴の音を誰が守るであろうか、それは他ならぬ自分しかない。自分はその覚悟、使命を胸に秋空をおおう雲に別れて故郷を旅立つのだと、これまた美を求める旅立ちの決意を述べたもの

であろう。美に殉ずる殉教者、それを己が使命としてこの人生を選択した、そこに啄木の人生の始まりがあった。そうした啄木の思想形成に大きな影響を与えた一人は与謝野鉄幹であり、いま一人は高山樗牛である。啄木が美に生きる天才詩人として自らを自負したその思想を支えたものは樗牛であるが、ここでは鉄幹から啄木が受けついだものを考えてみたい。

さきに掲げたFの歌「血に染みし軍の旗につつまれて佐世保にかへる君がなきがら」は戦争で死んで帰った遺体を詠んだもので、その底には愛国主義的なヒロイズムがある。Gの歌「鋸に似たる血がたな天地にとどめて死なば悔ゆることもあらじ」も同様に、死を覚悟して戦争に臨む精神がヒロイックな決意をもつて歌われている。いずれの短歌も、戦場で死に故国に迎えられた愛国の英雄を詠んだものである。

ヒロイズムが、その美感を最も発揮するのは、勝利においてより、敗北においてである。敗者の英雄に心魅かれる心情は、日本の伝統の中にいわゆる「判官びいき」として受けつがれている。鉄幹の短歌にはそれが幼稚ともいえる素朴な形で表現されている。啄木はこの愛国の悲劇の英雄を、美に殉ずる英雄として表現し、そこに自らの未来を夢みたのである。

血に染めし歌をわが世の名残りにてさすらいここに野に叫ぶ秋

明治三十五年十月『明星』に初めて掲載された啄木のこの一首は、ただちに『秋韻笛語』につながるものであり、啄木はこの時点ですでに退学・上京——つまりは文学者として血みどろの戦いの人生を生きる覚悟をしていたと思われる。血に染まった歌をわが人生の記念と残そう、自分は今、安らげき故郷を、学校を捨てた漂泊の旅に出るのだ。丁度、洗者ヨハネがその宣教にあたり、荒野で獅子孔して叫んだように、自分もこの秋、人生の真実と美を求めて旅立つのだ。これは啄木の決意であったが、その人生が終わった時からみればなるほど、その文学は苦闘にみ

ちた人生のかたみともなった。啄木は己が人生を予知して、その白兵戦に飛び込んだように見える。

三、啄木の人生の出発点としての『秋詠笛語』

啄木は数多くの日記を書き続けた文学者である。「数多くの」という言葉を使ったのは一貫した、まとまった日記というのではなく、それぞれが独立した「作品」のように書かれているからである。作品数にして計十一作品、初期のうちには『秋詠笛語』『甲辰詩程』『洪民日記』などという題がつけられるが、やがて『丁未日記』『明治四十年日誌』『明治四十四年当用日記』など、いつ書かれたかを示すだけのものとなっていく。最も有名なものは『NIKKI』いわゆる『ローマ字日記』（明治四十二年）で、これをもって啄木の代表作とする考えもある。

啄木の日記の流れをみると、その人生の遍歴がまざまざと浮かび上がってくる。啄木は日記に己が人生を封じこめた作家であり、生涯に渡ってこれほど日記を偏愛した文学者も少ない。

なぜ啄木は日記を書いたか——それはそれぞれの時期ごとに考えなくてはならない問題でもあるが、総じて言えることは、自己愛——波乱に満ちた劇的な己が人生の遍歴に対する愛着からである。啄木が、もし波風の立たない平凡な、おとなしい人生を送っていたなら、ああした日記は書かなかったに違いない。啄木は人生を「戦い」と考えていたが、社会と戦い、あるいは見えざる敵と戦って、その主役を演じた。演じながら同時に、それを書き続けた。主役たる己れを日記に語ることは大きな喜びだった。その日記を読むこともまた喜びであり、作品として公表しなかったという点では、一人よがりの趣味のようなものであった。啄木の日記に色濃く流れているものはヒロイズムであり、ナルシズムである。『秋詠笛語』を読むと私は、一人、自らの歌に酔いしれている歌手を想像する。

後年の日記になるとそうしたナルシズム的な要素は失われ、現実を直視する暗澹たる心境が綴られるようになる。それにしても、中心になるのは「己が心」である。「己が心」の歎び、悲しみ、怒り、嘆き、希望、絶望……これほどにも心の起伏に富んだ日記はない。これほどにも豊かで複雑な「心」を体験した人生も少ない。啄木は金田一京助に「これからの世の中には、もう昔のような英雄の出る余地が無い。最も多く悲み、最も多く喜び、最も多く憂い、最も多く嘆き、最も深く愛し、最も深く悩む、そういう人こそ新世代の英雄、少くとも最も生き甲斐のある人だ」と語った。「啄木の終焉」というが、もし「新時代の英雄」を疾風怒濤の波乱に富んだ劇的な生涯を送った人間、人生の喜怒哀楽を味わい尽した人間だとするなら、啄木ほどこの言葉が当てはまる文学者、いや人間はいないであろう。啄木の場合、それを一人称の形で語っている。即ち日記と短歌と。日記と歌は己れの心を直接に表現できるジャンルであり、手放すことのできないものだった。

啄木が日記を通して「己が心」を見つめ、それを表現することに大きな喜びを感じていたことは、次の明治三十五年十一月十五日付の細越毅夫宛書簡によってもわかる。

「私が都大路の塵の子となつてからの感懐は、胸に溢れ溢れて今では何者も記すべき者のない程茫然となりました。然しその刻々に旅なる窓の新らしき机に倚ってペンを持った数十頁の十五日間の日記は、私にとって他日多大の値ある者として、毎夕繰り返し繰り返し読んで居ります。若し時機がありましたなら何年かの後かにあなたにも御目にかけて笑はせてやりたいと思つて居ります」

この文章は『秋籟笛語』の初めの十五日間の記述を読んだの感想を記したものであるが、自信に満ちた啄木の、明るい笑い声が聞こえて来そうである。格調の高い名文(確かに一種の名文である)を書く喜びもさることながら、「繰り返し繰り返し」読むことによって深い満足感を味わい、自信を深めていく。『秋籟笛語』の十五日間の記述

は、啄木にとって自らを鼓舞・激励する文章でもあったと思われる。

ことに重要なのはその「序」だった。日記に序文をつけるのは稀であるが、この序文は日記の序というばかりでなく、啄木が自立的・主体的に選びとった人生の始まりを告げるものとして重要な意味をもっている。啄木は力強い次の一文をもって書き始める。

「運命の神は常に天外より落ち来って人生の進路を左右す。我もこ度其無辺際の翼に乗りて自らが記し行く鋼鉄板上の伝記の道に一展開を示せり」

具体的に何があったかはここには何一つ語られていないが、盛岡中学におけるカンニング事件、それ以後の退学・上京という一連の行動が背景にあつての記述である。学校という安定した平和な社会を捨てて、卒業後約束されている学歴社会のエリートとしての有利な条件を自ら放棄して、単身、己れの信念だけをより所として「無辺際の翼に乗」って、自由を求める詩人として歩み出そうとする。それはあまりに無謀ともいえるし、また若さの未熟とも、勇気ともいえよう。ともあれ「鋼鉄板上の伝記」という言葉には、自らの信念を貫こうとする男らしい決意と、そういう自分を自讃する気持ちが見える。

続けて啄木は、その道が文学者としての孤独な道であることを述べる。

「惟ふに人の人として価あるは其宇宙的存在の価値を自覚するに帰因す。人類天賦の使命はかの諸実在則の範に屈従し又は自ら造れる社会のために左右せらるるが如き盲目的薄弱の者に非ず。宜しく自己の信念に精進して大宇宙に合体すべく心霊の十全なる発露を遂ぐべき也。運命は蓋し天が与へて以て吾人の精進に資する一活機たるのみ。されば余輩は喜んでその翼に鞭うつて人生の高調に自己の理想郷を建設せんとする者也」

ここで啄木は二つの生き方を考えている。一つは社会の「実在則の範」（実社会の様々な約束）に「屈従」して

生きる生き方、一つは自己の「宇宙的存在の価値」を自覚し、信念と高い理想をかかげて生き、己が「心霊の十全なる発露」をなしとげる生き方。いうまでもなく、啄木は後者の身を選ぶ。これは啄木の前半生を貫く「反逆の論理」「反常識の論理」ともいうべきものである。既成の社会の規範、価値観に従って安定した道を生きるのではなく、どこまでも自己に忠実に生き、己が「心霊」を豊かに発達させること——啄木はここに文学者の使命をみた。「心霊」というのは「心」と同じような意味であろうが、その心が時代や社会を越えて人類に通じる普遍性をもつこと、「宇宙性」をもつという考えからこの言葉を使ったものであろう。そこには詩（芸術）を宗教と相通ずる人類救済の手段だとする考えも潜んでいる。

それにしても十七歳の少年の、こうした思想は、いかに早熟とはいえ、啄木一人で考えついたものではあるまい。「真似しい小僧」であった少年啄木は、ここでも時代の思想の圧倒的な影響・感化をこうむっている。啄木の反逆・反常識の論理の背景にあるものは高山樗牛の「文明批評家としての文学者」（明治三十四年一月『太陽』）だと思われる。

『秋詠笛語』をみると啄木は収入のためにイプセンの John Gabriel Borkman のオーサー訳を買い求め、これを翻訳し始めたことが記されている。Borkman ボルクマンは詩人的な空想に生きる、自らを選ばれた人間Ⅱ天才だと信じている人間である。それはそのまま啄木の人間像であり、収入を得ようとしたということ以上に、自らを表現しようとするための翻訳だったことを示してはいないだろうか。

啄木のイプセンへの共感は樗牛を経由してのものだった。「文明批評家としての文学者」の一節に次の言葉がある。

「イプセンは個人によりて翻つて境遇を規定せんとせより。是を以て彼が詩は意志の詩也、理想の詩也、『ブラン

『D』の主人公は實に是の勇猛不退転の意志の化現と見るべきもの也。彼にありては凡ての事『万事』か、然らざれば『皆無』也。彼は讓歩を知らず、況や屈辱をや。彼は是の本来の意志を貫徹し、實現するところに人生の極致ありとなし、随つて人は生まれながらにして戦死すべき運命を擔へるものと為なり」

イブゼンの詩劇『ブランド』（『ブラン』とも表記する）は、「一切か無か」をモットーに、あらゆる妥協を排除して奮闘、理想に献身して倒れる牧師ブランドの悲劇的な生涯を描いたものである。啄木が『ブランド』を読んだかどうか定かではないが、樗牛によって紹介されたブランドを自ら生きようとしたのではあるまいか。そこには死後、キリストとしてあがめられたブランドにならない、この世での生涯を「戦死すべき運命」をになつて勇敢に生きようとの決意がある。「血に染めし歌をわが世の名残りにて」の歌は、實は、単なる鉄幹的なヒロイズムではなく、こうした個人主義、天才主義の宣言であり、『雲は天才である』（明治三十九年）の天野朱雲の人生觀そのものである。朱雲（朱い雲、それは「血に染めし歌」とも重なる情熱のシンボルであろう）は石本俊吉に「全然破壊する外に改良の余地もない今の社会だ。建設の大業は後に来る天才に讓つて、我々は先づ根底まで破壊の斧を下さなくては不可」と語り「僕は遠い処へ行くまでだ。行先は、死、然らずんば戦闘。戦つて生きるのだ。死ぬのは：否、死と雖も新たに生きるの謂だ」と語っている。退学・上京から四年後に書かれた小説にも啄木の反抗的、ローマン的天才主義が生きていたことを物語っているのである。

その源泉は盛岡中学時代『明星』と並んで熱中した『太陽』連載の高山樗牛の思想であつた。盛岡中学時代の友人、ユニオン会の同人の一人小沢恒一は「何より啄木と私に多くの感激を与えたものは樗牛の文章と思想であつた。『太陽』に掲載される樗牛の評論はどんなことであつても必ず読んでその感想を話し合つたものである」と証言している。樗牛のローマン主義思想は当時、多くの青年達の心を捉えていた。啄木はその樗牛の思想をそのままに生

きようとした。青年はいつの時代にあつても、観念的理想に走りがちであり、言葉に溺れやすいものである。時代の思潮の感化を最も受け易いのが青年である。樗牛なかりせば啄木もなかつたであろう。

明治三十五年五月、啄木は岩手日報に「五月之文壇」と題して、樗牛について次のような熱烈な賛美の文章を書いている。

「論文壇は比較的寂寞として居る。第一に才人樗牛が病氣軽からざる由で太陽の誌上に彼の高華壯麗の論文が出来なかつたのである。然し乍ら彼の無題録は不相変燦として衆星を抜くの趣がある。

彼がニイチエに關しての宣言の如き、何如に彼れが面目を躍如せしむる事であらうぞ。

文芸批評家として当代の詞壇に逍遙の精透の批評と、鷗外の謹嚴なる品隲ひんしつとを除いて、誰も彼の右に出づる者はない。自分は彼の文を見る毎に、思はず心から敬服するのである。誠に、太陽五号の無題録中に左の意味の言葉がある。曰く

人間の欲する救助は三つである。曰く、永遠の恋、然らずんば死、然らずば狂

吾人の理想は三つある。曰く、完全なる生欲、曰く安眠、曰く

此語を味つて彼が熱烈なる詩人的性情の高渾の趣を敬せざる者誰あらう。彼れが俗目以外に超脱して居る所、正に野やに叫ぶ予言者の姿である」

樗牛を語るこの文章は、啄木がどれほど樗牛に同化し、樗牛的な理想に生きようとしたかをよく示している。「永遠の恋」——啄木は文字通りにこれを節子との間で貫こうとした。「永遠の恋」とは、情熱と理想に支えられた恋であり、「完全なる生欲」につながるものだろう。もしそれが叶えられないなら「死」を選ぶしかない。積極的に死を選ばないまでも、情熱と理想なき生は、無意味な「安眠」にすぎない。そしてこの二つが叶えられない時は「狂」

となるかもしれない。人は恋か死かを選ばなくてはならないように、「完全なる生欲」か「安眠」かしかない。「狂」は自らの意志の埒外である。樗牛が使った「狂」にあたる言葉を自ら発しえないところに啄木の思いの深さも感じられる。

啄木はこのようにして、情熱の感じられない盛中での学業を選ぶよりも、「恋」の道を選び、「文学」を選び、理想と情熱の生Ⅱ「完全なる生欲」に従って生きようとした。啄木の行為は樗牛の思想の実践であり、その最初の決断、行為が退学・上京という選択だったと思われる。少なくとも、この文章を書いた時点で、反常識、反社会の行為に走らんとする思想的な準備はなされていたのである。

啄木は樗牛の詩人的、情熱的な文章の圧倒的な感化に染まりながら、社会に反逆し、ブランドのように「自己自らに忠」に、「宇宙的存在の価値」を求めて、旅立とうとした。『秋籟笛語』の序文は波瀾にみちた啄木の人生の始まりを告げるものとして、きわめて重要な意味をもっているといわなくてはならない。

旅立ちにあたって、即ち「人生の高調に自己の理想郷を建設せんとする」にあたって、啄木はそれを支える友人、恋人の存在を思った。『明星』によって文学に目覚め、樗牛によって天才思想、自我崇拜思想を鼓舞されたとはいっても啄木の場合、それは友情と恋に深く結びついていた。続く一節は、未来への漠然たる不安をかいまみせながら、その厚い友情と恋を自らへの支えとして受け止めて旅立つ心が記されている。

「呱呱の声をあげてより十有七年。父母の膝下を辞して杜陵の空に学ぶこと八星霜。前途未だ漠として浮雲に入る。この秋流転の水流に従つて校を辞し友とわかれ双親とはなれ故山を去り恋ふ子の美しき面影とさへわかれて孤影飄然東都に出づ。嗟乎何人かよく遊子胸奥の天絃に知音たる者ぞ」

天才として世の常識に背いて自己の真実を求めようと旅立つ啄木は、その雄々しき意志の世界だけでは満足でき

なかつた。友人と恋人と——友情と恋と、熱い人情と愛をまざまざと実感した。孤独なる挑戦は、同時に愛についての目覚めを促したのである。これを「自己超克への意志」と「愛による連帯」といつてよいのかもしれない。明治三十六年、帰郷後に書かれた評論、「ワグネルの思想」における、ニーチェからワグネルへの道はこの時、すでに準備されていた。上京に先立つ十月十七日の細越毅夫宛書簡に「最高の意志は最高の感情を伴ふこれわが持論也 嘲風博士がニイチェに満足せずしてワグネルの愛の世界観を喜ぶも亦この理に外ならず 高き、強き、大なる、この三つの語に対する時我はひざまづきて讚ず」という一節がある。高い、強い、大なる意志をもって反抗的に生きようとする時、そこには「最高の感情」——愛の感情を伴う。愛は反抗と孤独の中においてこそ、一層深く自覚される。『秋詠笛語』をみると確かにその通りであつたことが知られる。啄木日記の中で、『秋詠笛語』ほどにも友情と恋愛を讚美している日記は他にない。「かくて我はわかれたり。故関の秋の風に袂ぬらしつつ親しき友と、恋しき人と」と断腸の思いで友と恋人と別れた啄木は、東京で、その書簡を読みながら幾度も涙ぐんでいる。「人若し『汝の慰藉者は何ぞ』と問はば、余は直ちに答へて示さん、右に百合の一花を左に郷なるユニオンの友らを指して」と記しているように、「百合の花」即ち、堀合節子と、ユニオン会の文学仲間——小沢恒一、阿部修一郎、伊東圭一郎、小野弘吉、そして啄木を加えた五人は共に文学を語りあつた仲間である——こそ、人生の高調めざして、一人上京した孤独な啄木の慰めであり、励ましであつた。

上京中の十一月十八日、後輩の小林茂雄（花郷）に宛てた書簡の、次の一節は『秋詠笛語』序の心を、親しみ深い筆緻で語つたものである。

「花郷さま。人生は頂上に向つての精進であります。相携へて虎竜の大踏歩を試みるべき時代は実にこの過度の二十世紀ではありませんか。

私は今三つの関係によつて生きて居ります。その一つは自分の自信でその二は我美しき恋人の慰藉でその三は親しき友人の情であります。私は兄に対して温かい温かい者を要求します」

参考文献

- 『兄啄木の思い出』三浦光子 理論社（一九六九年第七刷）
- 「啄木余響」「啄木の終焉」金田一京助（金田一京助全集第十三卷『石川啄木』三省堂）
- 「久遠の青年啄木」小澤恒一 教育科学社（昭和二十五年版）
- 「人間啄木」伊東圭一郎 岩手日報社